2022・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

50号
2022・7-2022・12

◉特集◉

昭和十九年十二月 直江津國民學校 疎開児童感想文

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

直江津の海とサメに想いを馳せて

井部真理

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

越後国都の視点

―文化財にかかわった半世紀―

歴史は「今日」への手紙

藍商人がつなぐ 住吉神社と泉蔵院

直江津の海とサメに想いを馳せて

井部真理

私はお隣の富山県富山市で生まれ、進学で地元を離れる一八歳まで毎日食卓にきときとの魚介類が並ぶ魚中心の食生活で育ちました。（きときとは富山弁で「新鮮な」の意味）

〝食〟という漢字は「人を良くする」と書き、食べ物は人の心も身体も作ってくれる大切なもの。小さなころから私の身体を中から支えてくれた海の食べ物たち。上越に住んでからも海の食べ物は心の真ん中にあり、その他のどこの土地にいても海の食べ物に惹かれます。海の近くを歩いて磯の香りを感じると心が穏やかになり、水族館の魚たちを眺めていると心が温かくなります。時々、直江津という街を一日のんびり歩いて過ごしたい衝動にかられるのは、海との歴史が積み重ねられた直江津という街にたまらなく惹かれるからだと思うのです。

上越で初めて出会った海の食べ物は色々ありますが、初めてスーパーマーケットの魚売り場で見かけて衝撃的だった〝サメ切身〟との出会いは忘れられません。思い出すと、その訊ね方はどうなの！と当時の自分にツッコミを入れたいほど恥ずかしくなるのですが、品出しをしている店員さんに「あの～このサメ切身というのは、いわゆるそのジョーズ的なアレですか？」と訊ねました。魚の名前は全国各地で標準和名ではなく地方名を使って呼ばれていることも多く、同じ名前でも違う魚を差すことがよくあるからです。そんなわけのわからない言葉で質問をした私に対して、店員さんは優しくにっこりと「そうですよ、そのサメですよ。この辺りではサメはよく食べますよ」と教えてくださいました。

薄いピンク色でぷっくりとしたその切身は、これまで食べてきた数々の魚と明らかに違う見た目で、当時、私が持っていたサメのイメージと結びつかない可愛く見える食べものでした。

味の想像をしつつドキドキしながら購入し、自宅で照り焼きにして食べてみました。…美味しい！　魚のようでお肉のようで不思議な食感。サメは軟骨魚類なので骨もなくとても食べやすい。なぜ全国的に食べている地域は少ないのだろう、なぜ新潟県でも上越だけが昔から食べてきたのだろう。

食育に取り組みたくて食業界に入った私にとって、郷土料理や郷土食は大きなテーマの一つで、上越のサメ食の歴史を調べ始めるとサメに纏わる興味深い歴史的事由が次々と見えてきたのです。

現存する古文書によると、少なくとも江戸時代には直江津の海でサメ漁が行われており、高田藩は報奨金つきでサメ漁を推奨したそう。直江津の漁師さんたちが捕まえたサメのヒレはフカヒレ干しにされ、長崎経由で中国に輸出され、高田藩の財政を支えてくれたのです。そしてフカヒレ以外の部分は、当時自然災害が続き飢饉に困窮していた庶民の貴重なたんぱく源になったり、肝油が行燈の燃料になったり、皮が漢方薬や刀の鞘やすりなどに使われたりしたのです。

直江津の街を散歩していると、福永神社という「鮮魚商人中」と書かれた大きな石碑のある神社があります。石祠の横には「福永十三郎翁の徳をたたえここに祀る」と書かれています。江戸時代は藩専売制を実施しており、サメを含む鮮魚は、直江津には漁業権があったものの販売権はお城のある高田にしかなかったのだそうです。販売権がなく生活に苦しむ直江津の人々のために江戸幕府に一〇年も陳情し裁判を続け、直江津に販売権を勝ち取った福永十三郎翁は直江津の英雄なのです。直江津に行くとそっと手を合わせています。

先祖代々食べられてきたサメ肉は、現代ここに住む私たちの身体にもとても必要な食べ物ではないかと感じます。明治時代から食育用語として言われてきた〝身土不二〟という「その土地に住む人と風土は切り離してはならない」という意味の言葉が頭に浮かぶのです。

魚食離れと言われて久しいですが、サメも他の魚と同様に年々消費量が減っています。先人の苦労や感謝が詰まった歴史あるサメ食文化。江戸時代の直江津に想いを馳せながら、今晩のメニューにサメ料理はいかがでしょうか。

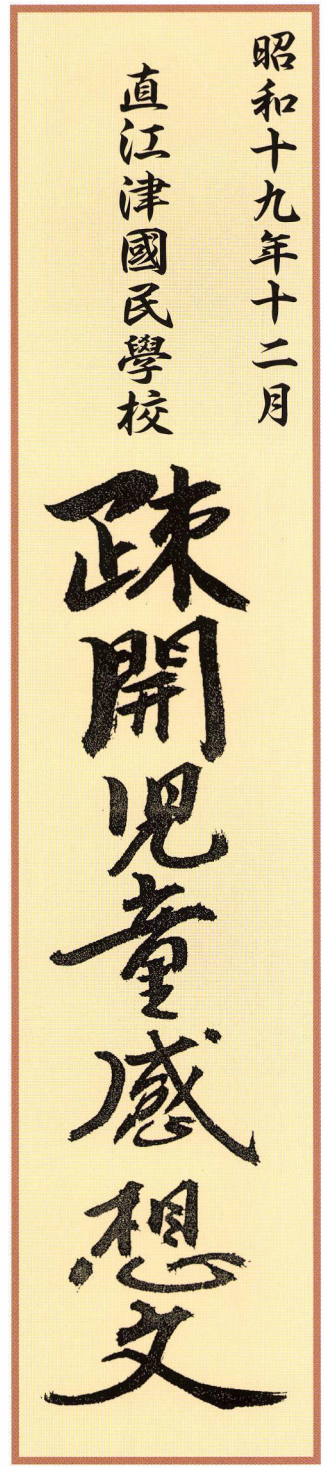
大切なサメ食文化がいつまでも継承されていくことを心から願っています。



サメの御平



いべまりさん
富山県出身。
郷土料理研究家・サメ食文化研究家・kitchenstudio いべまり代表。
上越の食に魅せられ、二〇一三年に上越にキッチンスタジオをオープン。
食のイベント企画運営や地産地消の商品開発やメニュー作り、メディア出演などを通して食の講座や料理教室などを行っています。まさに〝サメ愛〟の人です。



太平洋戦争が厳しくなる昭和一八年の末から地方へ学童を疎開させる「学童疎開」が始まり、そのなかで「集団疎開」ではなく親族を頼って、直江津へ「縁故疎開」してきた児童の「感想文」が一冊に綴じられて直江津小学校に保管されていた。

感想文は昭和一九年一二月に、当時の直江津国民学校初等科四年生から六年生、高等科一名の六七名が、疎開の体験を綴ったものである。

出身地は東京都四五名、神奈川県一四名、大阪府六名、愛知県と千葉県が各一名で、四月から一二月にかけて疎開して来ている。保護者同伴が一六名、一人または兄弟姉妹で疎開しているので、実際には一〇〇名を超える子どもたちが疎開していたと想像できる。

上越地域に「集団疎開」も受け入れていたが、平成二〇年に上越市民を対象に収集した戦争体験談の中に、当時一九歳の宝金ヒデさんが「東京都住吉國民學校集団疎開寮母」として赴いた興味深いエピソードを交えて思い出を語っている。

昭和一九年八月三一日、葛飾区の住吉國民学校児童二一〇名とともに直江津駅から、当時、春日村であった国府別院に男子八〇名、和倉楼に男子五〇名、光源寺に女子八〇名が分かれて集団生活を送ることになった。

ヒデさんは別院寮の寮母として早朝から子どもたちの生活全般を見ながら国府国民学校へ送り出していた。

この国民学校とは、昭和一六年の国民学校令によって、それまでの尋常小学校・高等小学校を国民学校と改称したもので、現在の学制の一年生から六年生までを初等科とし、現在の中学一年から二年生を高等科として、児童ではなく「少国民」と呼んだ。科目は国民科（修身・国語・国史・地理）、理数科（算数・理科）、体練科（武道・体操）、芸能科（音楽・習字・図画工作・裁縫）で、高等科には新たな科目が加わった。国民学校は昭和二二年三月まで続いた。

直江津には町立尋常高等小学校と町立女子尋常高等小学校（現直江津南小学校の校舎）があり、大正一二年、町立尋常高等小学校に統合され、旧女子小学校の校舎には尋常科三年まで置くことになった（南校舎）。その後、国民学校に替わっても初等科三年まで通学した。

「感想文」の本誌掲載について

原本は平成三年に発行された直江津小学校「創立百二十周年誌」の制作を委託された北越出版が学校に保管されているのを発見し、一部を記念誌に掲載するとともに、了解を得て複写し保管していたものである。

直江津小学校が上越地域で最も古い歴史を持つ学校であり、この「感想文」を含む昭和二〇年までの学校資料は上越市立公文書センターに寄贈されているため、本誌に掲載するに当たっては、センターと協議したうえでプライバシー等に配慮し、その一部を掲載した。

なお原本には、氏名・学年、前住所と学校名、疎開先町名と氏名、同伴者が明記されている。

まもなく太平洋戦争後八〇年、二度と出してはならない「戦時下の子どもたち（少国民）」が何を見ていたか読み取っていただきたい。

◆注

学年・組
出身地・出身学校
疎開先

のみを記し、本文は新漢字・新かなづかいに改め、適宜、句読点・改行を施して、必要に応じて（　）や傍点を付した。

但「國民學校」のみ、旧漢字のままとした。



直江津小学校　運動場の上に見えるのは戦時中の防空監視所
昭和25年5月　憲法記念・子供の日判定記念灯篭リレー

初等科四年

四男竹組
東京都大森区（大田区）　大森第五國民學校
曙区

感想

三月二十八日に僕はこちらへそかいして来ました。直江津に来た時は、まだ東京よりずっと寒いことがかんじました。学校（は）どんなとこかと直江津に来る途中思いました。町に来ていますと、もう雪が消えていました。夏になるともうすぐ水泳やなにかができていいと思いました。秋には直江津にはいろいろものがなります。今では、もう冬になり、八日にもう雪がふりました。もう本とうの冬になりました。直江津は東京よか、ずっとさむいと思いました。東京はもうくうしゅうになりましたが、僕は直江津にきて、しやあせだと思います。そかいして米英をげきめつします。

四男竹組
大阪市東淀川区　愛日國民學校・十三國民學校
本砂山区

感想

僕が直江津へきた時は七月の終わりでした。ちょうど夏でした。海が近いのですぐ水泳がで来ますのでうれしいです。夏になると直江津は網引きがで来るのです。網の一番おわりのをあげると、いわしやあぢがぴんぴんとはねています。おじいさんが網引きにいっているので、いわしやあぢをもって来てくださいます。

夏は熱（暑）いのですが、今は冬だから寒いです。大阪

は冬でもあまり寒くありません。
直江津は魚がたくさんとれるので、僕の好きな魚がたくさんたべられてうれしいです。
今は冬なので寒いですが、この寒い冬を通りぬければあたたかい春がくるので、僕はこの寒い冬が通りぬけるまでがんばります。

四男竹組
東京都浅草区（台東区）　清島國民學校
寄町

感想

ぼくは八月四日に来ました。
ぼくはもう五カ月いましたが、もうおしょう月が来たのかとおもうとぼくはうれしくなって来ます。ぼくはうちにいたときは、ぼくがいちばん下でしたが、こっちの町、寄町です。東京にいたときの区は浅草区ですが、学校ではいっしょうけんめいしています。はきものは足がついている。ぼくは、このひどい風に向かって出るのが、ほんとうの日本人であるということをかんじた。ぼくは、東京でほとんど毎日のようにくうしうをうけているので、大変だろうと思う。ぼくはこっちの方が面白いです。

四男竹組
東京都世田谷区　八幡國民學校
砂山区

感想

こっちの方が魚ややさいがたべられます。町の方もみんなともだちが、しんせつにしてくれる。学校でも友達がしんせつにしてくれる。
こっちの方がずっと寒い。マントがなくてこまる。ふゆふくがなくてこまります。町でもあそびばしょがあっていいです。海もあつてうれしい。そして川や海でつりがとても楽しい。海でおよいだり（して）いると東京なんかはとてもやで、ひろいのはらもないところであそぶより、こっちで海や川でおよいだほうがずっといい。川でふなをつりをしたり、すくうのがとてもたのしい。もんぜん（門前）の方ですくうと、なまづやこいがいっぱいはいってくる。冬はスーキ（スキー）がとてもおもしろい。ぼくはへたですべれないけど、ちっとすべるのがとても楽しい。

四女梅組
大阪市大淀区（北区）豊崎西國民學校
旭区

直江律へ来る時はうれしかったけれどもお父さんお母さんが帰られる時は少しさびしい気がしましたが、二、三日たってから、近所の子どもが遊びに来ていろいろなことをして、いたわってくださった時は、もう家のことも忘れ、なにもかも忘れて近所の子どもたちと遊んでいました。
家ではおじいさんも、おばあさんも、おばさんもいらっしゃいますが、冬になって風を引かぬようにと、私たちのねている間にふとんをかけたり、いろいろのことをして風をひかぬようにしてくださいます。
また、お米がないといわれて、じょうだんかわからないけれど、もう大阪へ一人帰らそうかとおっしゃったことがありました。私はそれを聞いて、くやしかったけれ

どもがまんして、それをこらえていました。
たべものは、大阪よりは何でもたべられます。私たちの一番すきなおさかなです。私が直江津へ来たのは八月です。それからさかなは二、三回ありました。前いた時は、おさかなといっても二カ月に一回ぐらい、はいきゅう（配給）があります。
学校へ来て遊んで下さるのは、高等科の人たちが遊んで下さいます。さむさも、何もかも忘れて私は楽しく一日をすごしています。また私たちの組の人たちも私をよく遊んで下さるので、少しもさびしくはありません。
また、はきものは一番こまります。長ぐつです。学校へ行く時、あの高い足だをはいて行きます。秋の初めのころ、あまりたくさん雨がふったけれども私は近所の子どもたちに遊んでもらいました。
大阪は直江津よりはたくさん雨がふりません。雨がふる日には弟たちと遊んでいましたが、こちらの家には子どもはいないので、お友だちがない時はさびしいです。直江津の学校に上がる時、私はしっかりべんきょうをしてりっぱな日本人になりたいと思いました。

初四女竹組
東京都日本橋区（中央区）坂本國民學校
一至寺（？）

感想
このごろ寒くなって雪がふりつづきました。たいへんはき物に不足しております。この間、一至（？）の人からかり、たいへんよろこんで毎日学校へかよっております。寒さは東京とかわりません。東京には子供ひとりいません。東京ではわかい人もみんなはたらいて戦いを勝ちぬこうというきもちで、いっしょうけんめいはたらいております。
お母さんが、寒いなら兵隊さんのことをかんがえて一生けんめい勉強してこの戦いをかんがえていればよいといわれて、私はよろこんでいます。いまは、まんとにもこまっているけれど兵隊さんたちのこと思えばへいきです。
だんだん寒さはひどくなると思いますのでかぜをひかないようにきをつけて毎日毎日うれしくくらそうと思います。先生もよいのでとてもうれしくて、この戦いを勝ちぬいて東京へかえります。

初四女竹組
東京都足立区　西新井國民學校
新坂井区

感想
私は八月こちらへきました。きた時はなんだかさみしいようなきもしましたが、今では、そんなきは一つも、おこさず一生けんめい勉強しております。
寒さは、東京とかわりはありませんが、ただ雪がふるだけです。今日もぽつぽつふっております。私は長ぐつもまんともってていません。それで、今いる家のおばあさんから、よかれん（予科練）へいっている人の長ぐつをなおしていただき、はいています。まんともちいさくなったのでそれをついでいただいてきております。
今日、私たちの組みの人が「今は、男のものをきるときだよ」といいましたが、ほんとうに今は、女だの男だのは、いっていられないと思いました。このと地で、こんなにしあわせにしていただけるのも、みんな兵隊さんのおかげだと思います。私もますますがんばります。

四女松組
東京都板橋区 板橋第六國民學校
本砂山区

感想

東京から、こちらへ来てだいぶんなれました初めのうちは、はずかしくて外へ出て遊ぼうにもでられませんでした。すこしずつだんだんとなれて来ました。今、ここでこんなに雪が降っているのに東京は、毎日お日さんがあたっています。雪が降っても私は長靴も、まんともありません。いつも、あさ靴にとよまんとをきて学校へかよいます。足がつめたくても、出来るだけがまんをしています。学校から家へかえるともう、もんぺはびっしょりです。東京は雪が降っても少ししかつもらず、すぐきえてしまいます。ですから高げたでも、学校へかよえます。こちらの気候はとてもさむい。むこうの気候はとても暖かいのですから冬はくつしたをはかなくてもかよえます。

こちらの方の学校と東京の学校とは、すこしちがいます。東京の学校は家の中の運動場がありません。外の運動場が一つしかありません。いつも男も女もいっしょの運動場で遊びます。ここの学校のように雪だの雨が降れば、中の運動場で遊べるが東京の学校は雨だのが降ると、教室で家から本をもって来て、よんで遊びます。

東京から来る時は家からはなれるのがいやでした。でも、もうこちらの家もなれてしまいました。こちらへ来て急にさむくなったのでおかあさんもこまっていらっしゃるようでした。私はお母さんに心配をかけないようにやり抜いておりますけれども、がっこうへかよう時はどうしてもさむいといってしまうので、おかあさんは、さむいならもっとたくさん着て行きなさいといってくださいます。夜はとてもさむいので、こたつを入れてねます。私も妹たちもみんなこたつを入れてねますが、おかあさはいれてねません。

学校へかようときのとよまんとは一年生の時のです。今はとてもみじかくてひざをすぎるほどですが、もうこれよりないのでがまんをしております。みんなそかいをして来た人は とよまんとです。私ばかりでないから、がまんをして、まんとがあるまでやり抜こうと思っております。戦いがかてば、なんでも自ゆうにかえるから、かつまではどんなに寒くてもやり抜きます。

四女松組
神奈川県横浜市 白幡國民學校
砂山区

感想

私は横浜から弟と二人でそかいして来ました。汽車にのりながらどんな学校かしら、すぐお友だちが出来るかしらと考えながら来ました。初めてこの学校へ来たときは、はずかしくてたまりませんでしたが、すぐみんなが一しょに遊んでくれました。私はこの学校のお友達はみんなしんせつなお友達なのでうれしく思いました。

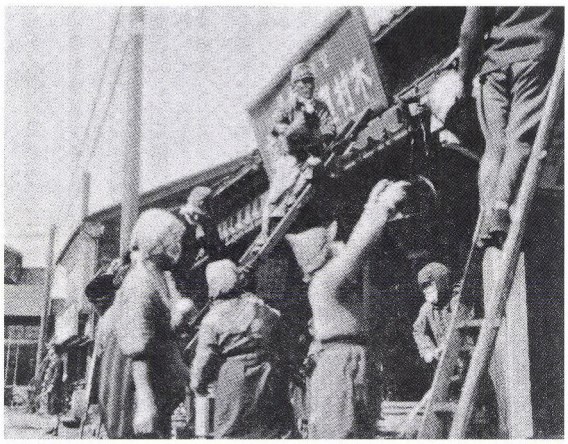
向こうの学校では毎日お昼のごはんが出ます。こちらは十一月から雪が降りますが、向こうでは十二月から雪が降ります。でもあまりたくさん降らないのでみんなかさっきりもっていません。私ももっておりませんので外とうをマントのかわりにきております。向こうにいるお父さんから、いつも手紙に、こちらは毎日空しゅうに来るがみんながんばっているときます。

初等科五年

五男梅組
東京都神田区（千代田区）金華國民學校
舟見区

感想

僕は七月三十一日に直江津に来た。
この日、田舎の者はえきにむかえに来て下さった。
僕は、この日、この時、「もう、直江津の者なのだ。」と自覚した。それから、何日かたった。
八月二日の日に、おばと自分と二人で、直江津国民学校の門をくぐった。
それから、先生におあいした。それから直江津の子供のあらいことをおしえて下さった。
そして、「明日から登校してください。」といいました。
八月三日にいわれたとうりに登校した。
そして、東京のことを思った。



自分の友だちは、集団そかいの者もいた。そして、雪国の子供の強く雄しいこと。僕もなるぞとがんばった。

五男梅組
東京都深川区（江東区）深川國民學校

感想

ぼくは、東京と直江津との、気候のすばらしいのには、おどろいた。東京は、冬というと、てんきがよくてなかなか日がてっている。ぼくは、東京よりも、たべ物は、なかなかふじゅうではないとおもっている。ぼくは、ながぐつをもっていないが、げたで学校へくるが、足がつべたくなっていてもレイテ島のことをおもえばなんでもないと覚悟はしている。東京では、昼夜もないといっているのにぼくたちは、昼は学校で、べんきょうをし、夜は、ぐっすりねているのは、兵隊さんのおかげだと毎日学校では、もくとうをしています。
ぼくは、毎日おじさんと、おばさんにいろいろと、お話をしてもらっています。ぼくも、東京にいきたいとおもっているが、戦争の勝つまではと、けっしんはしている。
ぼくが汽車に乗っていると、ぼくは国のために、そかいをするんだとかんがえていました。家につくと、むねは、わくわくとして、ぼくはおばさんに、一年はがまんをしなければならないといった。ぼくは、八月の二日にこっちへきたが、まるでゆめのようにいつのまにか寒くなった。
ぼくは、学校へはいった時、校長先生が、直江津の子どもは、けんかをするが、らんぼうなことはしないと、いった時ぼくは、早く直江津の学校になれるといいなと

思った。ぼくは、家にかえると、うれしくてたまらなかった。ほくは、おばさんに、げんきであすから学校へいってらっしゃいといったので、はいとこたえて、あす学校へいくしたくをした。ぼくも、げんきで学校へ行きますと、おじさんと、おばさんにげんきでこたえた。

五男竹組
神奈川県川崎市　旭町國民學校
新横区

感想

こちらの学校では、むこうの学校と違って運動場が家の中にある。むこうでは運動場はみんな外である。直江津は雪がたくさん降るのには、おどろきました。ぼくは、長ぐつや冬服がないので困ります。こちらの家ではみな、こたつがあるのには、おどろいてしまいました。むこうでは、こたつでなくて、あんかです。それからいろりがあって、ろう下がないのです。ですからむこうと、へんな心持がします。こちらでは海が近いので、こちらのものは元気である。

むこうは、高等科の人がいないのです。一年から六年まで、そのほかに高等科だけの学校があります。むこうは、女子と男子といつでも一しょに朝れいをしますけれどこちらは女子と、いっしょに朝れいをしない。

ぼくはこちらへ来てたまげたのは、あまりに雪や風が降ったり吹いたりするのでたまげてしまいました。

こちらでは区で学校へ通いますけどむこうは、ぶんだん（分団）別で並んで通います。おわり

五男竹組
東京都向島区（墨田区）　第二吾嬬國民學校
本砂山区

汽車に乗って長野あたりへ来ると寒さがだんだんきびしくなって来ました。でも汽車の中へ入っているので口ではいえませんでした。

東京で兄さんたちが空襲にあっていても向島区はまだ、一つも爆弾はおちていないとの手紙で、ぼくは安心しております。ぼくは、こっちへ来て雪の多いのに、おどろきましたが、ぼくは、小さい時、高田にいたので、大雪に、いっぱいあいましたので雪が面白いので、いつも雪がいっぱいふってこいと心の中で、たのんでおります。

物のたりないのは野さいだけなので、そかいをしても、こんなにあるものかなと思っています。

五男竹組
東京都荒川区 第一日暮里國民學校
古城区

感想

ぼくはこちらへきたとき直江津の大きいのにたまげました。こちらの高等二年の人といっしょに魚つりにいきました。ぼくはおもしろくてたまりません。直江津はいいひとだとおもいました。つぎの日はうちの高等二年の芳ちゃんといっしょにオヨギニイキマシタ。芳ちゃんたちがおよいでいるとぼくたちは橋の上からいしをなげました。ちょうど芳ちゃんのあたまへぶつかりました。芳ちゃんは「いたい」といいました。夕がたになったのでかえりました。ほんとうにいなかはいいとおもいました。

初五女梅組
東京都渋谷区　上原國民學校
四谷区

感想

私は、こちらへ来てこの雪にはおどろいた。東京の雪は十五センチしかつもらない。こちらの気こうは寒い。空気がよいので東京にいた時よりずっと太った。こちらのおじさんおばさんはよくしてくださるので、私はし合わせだと思う。

こちらへ来て学校へはいる時みんなが私の顔をじろじろと見るのではずかしくなり顔が赤くなった。はいりたて、私が東京のことばをつかっていたらみんなが笑った。私達の先生はよい人である。お友達もみんなよい人だ。こちらへ来てすぐお友達にもなれた。家には五つのまさえちゃんがいる、まさえちゃんはとてもおもしろい。いつも人をわらわせる。組では山田さんととても仲よしだ。いつも石坂さんと三人でおにごっこをして遊んでいる。東京から手紙が来るととてもうれしい。

こちらのしんせきの人も私をいたわってくれるのでありがたい。ねるときは四人でそろってねる。ねるとすぐ話が始まるので、ねる時間がのびてしまう。

私は明治神宮のそばから疎開して来た。山田さんは洗足池のそばから疎開して来たのだ。この人は四つの時からピアノをならっていたのでいまではとても上手である。

私はさみしくなると東京のことを思っている。私たちも国のために疎開しているのである。勝つまではがんばりぬこうと思う。

五女竹組
東京都荏原区（品川区）　杜松國民學校
旭区

感想

東京から、初めてこちらへ移った私は、これからは、おじ様、おば様に、ごやっかいになることになりました。一ケ月二ヶ月たつうちに、組の人たちにもなれ、ほんとうにうれしく思っております。こちらの方は雪が多く屋根くらい積もるのだという事を聞き、たいへんびっくりしました。町の人たちと、なかよく浜へいって、ここは日本海ですよと教えられました。どこまでもどこまでもはてしなく、続く海を、私は一とうり見渡し胸をはり、しんこきゅうをしてみました。

東京が大爆撃との事を新聞でもラジオでも聞いたり見たりしました。母からの手紙によると、たいへん、ひどいとの事、安心して、ごうの中へ入った と聞いた時は、ほんとうにうれしかった事はありません。この時ほど父母のありがたさが、しみじみと感じられずには、いられませんでした。これからも先生のお教えをよく守り、何のふそくもふきとばし一億がみな一つになって力強く世界のはてまで進むつもりです。　オハリ

五女竹組
東京都城東区（江東区）二亀（第二亀戸）國民學校
古城

感想

東京から、汽車にのって来て、私は汽車の中で東京とどうしてはなれなければいけないのだろうと、ひとりでかんがえました。今大きな戦争がはじまっているのだか

らしかたがないと思うとたん、なおさら田舎にはやくつけばいいと思いました。

やっと田舎につきました。

一か月二か月三か月四か月たち、もうすっかりなれました。

あのにくいにくい米英が東京のていと（帝都）にせまりこんだとき、私はしんぱいでしんぱいでたまりませんでした。でも家から手紙がきたのであんしんしました。ただちかくにあへん(破片)がおちただけだとかいてあったので、私はよろこびました。

こんど、やうつり（家移り）なので、私は三区へいきました。雪がたくさんふるのではおどろきました。

雪がふるのに、ながぐつがないのでこまりますが、でも兵隊さんのことをおもえばなんでもないと思いました。

ふぶきの時は、家からやだなあと思いますが、あしがむくと、きてしまいます。私も一しょうけんめいでやります。



五女松組

愛知県名古屋市　堀田國民學校

四ツ屋区

感想

私はこちらへ来ました。弟とふたりできました。だんだんさむくなりますので私たちはまんともないし、ながぐつもありませんから二、三日たちますと、おかあさんと弟がきましたので、私はうれしくてたまりませんでした。

それから家へはいりました。それから私たちはみんなでおかあさんのところへいって、おかあさん、むこうはどうしましたかとたずねると、お母さんはだまっていました。

それからね、きのうのじしんはおおきかったねとおっしゃいました。私は名古屋はどうしましたかとたずねると、おかあさんは、大きなじしんでしたよ、家はこわれた家もありました。そうして家のしょうじがやぶれてしまったよと。おかあさんに、おばさんのいえはつぶれてしまったそうよ、そうして、こしていきなさいというと、おばさんはね、またどこへこしていったかわからないのね、とおっしゃしました。私はおばさんはね、しっとったら、てがみをやるのにというと、私はおかあさんにいうと、いや、まだどこかわからないからねといって、おしえてくれました。

私はさむいなというと、おかあさんはきて、わたしにおっしゃいました。おかあさんは私に学校はちかいに、ええねとおっしゃいましたので、私は、いえ、私はまんともないし、ながぐつもないものだがね。といいますと、お母さんはおねがいしてもらいますといいます。私は、学校にもながぐつがないといってるのに、だめだわさと

いうと、おかあさんは、そんなら、きたときにむ（も）らいなさい。

※昭和東南海地震
昭和一九年一二月七日午後一時三六分、三重県尾鷲市沖二〇㎞でM七・九の巨大地震が発生。当初は遠州沖大地震と呼ばれていたが、東海地域の軍需工場が壊滅的な打撃を受けたことを隠蔽するため「東南海地震」に変更したと言われている。死者・行方不明者は一二二三名を数えたとされる

五女松組
神奈川県川崎市　大島國民學校
横区

感想

ここへ来てから冬は初めてなので、朝、学校へくる時、長ぐつがないので足がつめたくて、冬中、たびやくつしたをはかないというので、私も我慢しています。川崎の学校は、冬はたびやぞうりをはいていたので、疎開してから急にたびだとかをはかなかったので、つめたくてたまりませんが、自分だけがつめたいので、私はがまんをしています。

冬、雪のおおい国々なので朝学校へ来る時、げただと、げたの間（歯）に雪がついてなかなかあるきにくいのでとてもふべんです。

きた時は、お友だちも親切にして遊んでくれたりします。

冬、大雪になると、とてもげたではこられないのでどうにか長ぐつを心ぱいしているので、学校から帰って来ても遊ぶ人がいないので、いつも一人でこたつへはいって本をよんでいます。学校にいれば足はつめたいけれど、お友だちがたくさんいて親切に遊んでくれますので、私はとてもうれしいのです。

疎開する前は早く直江津へいきたいなあと思いました。ただ長ぐつがないの大雪の時に困るのです。

五女梅組
東京都大森区（大田区）赤松國民學校
新川端区

感想

私は小さい時こちらへ来たことはなかったが、今、はじめて疎開して来た。東京より、空気や、たべ物が、よいので、まるまると太った。

この間、降った雪には、おどろいた。

初めてこの学校へ来た時、おどろいた。何から何まで、皆違う。お友達は、とても、しんせつである。私たちの受持の先生はとてもよい先生である。こちらでは、ことばも、とうきょうと違う。「私」ということを「おれ」とか「おら」とかいう。けれども、けっして笑わなかった。家では、六年の京子ちゃんという、ほがらかな人がいる。毎日、遊んだり、勉強を教えてもらったりしているので、ちっとも帰りたくはない。

家からも時々、手紙が来る。そのたびに、何か送るとかいてある。このあいだのお便りにも手袋をあんで送るとかいてあった。私は、うれしくてうれしくてたまらない。ねる時は京子ちゃんと京子ちゃんのお母さんとねる。

こちらでは、一ばん仲よしなのは東京の明治神宮のそばから、疎開して来た小林さんである。この人は、向こ

うにいた時ハーモニカをならっていたそうだ。
こちらへ来たすぐ、長ぐつをもらった。学校へ行く時は、いつも、その長ぐつをはいて行く、まんとは、どうにか京子ちゃんのお姉さんの小さい時のまんとをかりている。だから、ちっともさむくはない。家の人と、たのしくくらしている。

五女梅組
東京都浅草区（台東区）精華國民學校
寄区

感想

私は、そかいしてきた時は、七月の末であった。こちらへきて、夏、海へ毎日いけるのはほんとうにうれしく思いました。たが、だんだん寒くなると、こっちは、東京とちがって、雪がいっぱい降るのに、私達、そかいしてきた人は、まんともないし長ぐつもない。と思うとかなしくなってしまう。私は、いつでも、学校へくる時、戦地の兵隊さんのことを思って、心の中で一、二、三とかぞえて、いさましくなる。

時々私は、こんなことを思ってしまいます。こんなに、雪が降るなら東京にいた方がいいと思う時があります。たべ物、きる物何も不足なくすごしていかれるのは、ほんとうに私達はしあわせです。

東京の本所あたりは、私はびっくりして、さっそく、お父さんおかあさんの所へ手紙できいてみると浅草はまだなんでもないときいて安心しました。けれど毎日空襲がかかっていつも防空ごうへはいっているそうです。

私はいつも家の人からいわれています。そかいしてきたからこそ、防空ごうへもはいらず、空襲にもあわずほんとうにしあわせなんだよ、だから一生けんめい勉強して、おかあさんおとうさんを、心から安心させてやりなさいといわれます。

初等科六年

六男梅組
東京都牛込区（新宿区）市谷國民學校
片原区

感想

二学期の始めに、僕は国の為に直江津へ疎開して来た。汽車の中で僕は東京をはなれる時になんとなく不安な気持ちがした。父は敵の空襲に合っても大丈夫だろうか。田舎の学校の人達は皆よい人だろうかと思いながら、直江津に着いた。

次の日は二学期の始業式だったので、祖母と母と北校（現直江津小学校）に来て先生におあいしたら、僕に「一年の時こちらの学校に居なさったですね。」と、いわれた時はちょっとうれしかった。

一日目に教室へ行って待って居ると、皆じろじろ見るのでとてもいやだった。そのうち見ていると一年の時に中のよかった鈴木君が居るのに気が付いた。そのうち先生がいらっしゃって、「時間表をうつしていなさい」とおっしゃったので、うつして居ると松・竹の組の者が見に来た。時間表を書いてから外へ出ると（授業が）始まったので並んで教室へ入った。先生がいらして僕を紹介して下さった。場所は鈴木君の後ろだった。

その日から約四ヶ月、僕もだんだんなれて、今では「がき少将」ぐらいになった。

その間に一ばんつらかったのは南校（現南小学校）掃

除に行った時に、ほかの者が作業をして居るのに僕達三、四人は「釘たし」をしていた所へ先生がいらっしゃって「なにをしているのだ」といわれたまま運動場の方へ行かれた。僕達は「さあこまった」と思い、先生の後ろから入って行くと先生は「今外で遊んでいたものはここへ来いとおっしゃった。僕達はしおれて先生の前へ並んで説教をされた。僕は泣きそうになってしまった。やっとゆるしてもらって掃除をして帰って来た。それ以来、僕は掃除の時に、なまけたことは一度もなかった。僕は、ほんとうによい先生だとつくづく思った。

僕は大きくなったら先生の教えをよく守り、立派な日本となって神風特攻隊の後をつごうと心に堅く誓った。

六男梅組
東京都深川区（江東区）東陽國民學校
古城区

感想

八月十六日夏の太陽が照りつける時、直江津に疎開して来た。たびたび直江津へ遊びに来たから疎開して来ても近所の友達とは、すぐ遊べた。海へ泳ぎに行ったり、川へ魚釣りに行ったから、しあわせでした。夏休みが終わると学校へ行った。学校で、てつづきしてもらって、そのあくる朝初めて学校へ行ったが、なんだかはづかしい気持ちする、皆、僕を見て新米とかいったけど、僕は、じっとがまんをした。これも国の為である。

二日、三日と学校へ行くうちに組の生徒ともすっかりおぼえ、一緒に遊んだ、もう家の近所の友達、学校の生徒と一緒になって遊べたのでしあわせだった。

校長先生の話によると、集団疎開は一日寝小便すると一日ご飯をたべさせない。集団疎開とくらべると、君達はずっとしあわせだ。といった。校長先生のいった通り僕達はしあわせだった。一カ月、二カ月たつうちに、直江津のことば、直江津の町の様子もすっかりわかって、嬉しくてたまりません。

十一月の下旬から、寒くなって来たが、僕は直江津出身であるから、又は、兵隊さんの事を思えば寒くありません。近ごろ東京は空襲が多くて、僕は直江津へ来て、東京にいると、今どんな目にあわされたかわからない…。

六男竹組
東京都下谷区（台東区）西町國民學校
古城区

感想

僕は昭和十九年九月二十八日にこちらにきました。こちらにきて、学校へはいったのが三十日でした。はいってから、一番先に思ったのは、お母さんのことでした。お母さんもこの学校をそつぎょうしたと思うと僕の机がお母さんがつかったかと思うと、なんだかお母さんと一しょに勉強している心になります。

第一番に思ったことは、町のようす、つぎは町の人でした。町の人は、しんせつです、そのことは、十二月八日雪が降り、一尺もつもり、僕ははき物がなくてこまっていました。その時に、皆が僕をよびにきてくれました。すると、僕がはき物がないとすぐにわかってくれました。そうしてよいことがあるから、きみのたかげたをかしてくれといいました。僕はたかげたをわたすと、そのたかげたをともだちがはいてくれて、僕にくつをかしてくれました、その日、学校のかえりに僕はたかげたをはいて

かえろうとすると、友だちが道をおくってくれました。
第三番めに思ったのは警戒警報や空襲警報です。今、東京都にいれば死んだかもしれませんが、こちらにいるため警戒だけですんでいるのは、ほんとうにうれしいです。東京都にいるといろいろなたべる物に不じゆうしますが、なんにも不じゆうしてはいませんが、今、不じゆうしている物ははきものです。終

六男松組
大阪市南区（中央区）高津國民學校
高崎区

感想
自分がこの土地に疎開者（の）一人として、はるばると大阪から来たのは八月の八日に来たとき、初めて見たこの学校、私はずいぶん、りっぱな学校だと思うと大へんうれしく思いました。家の者は、私と弟と二人をなにくれとおせわして下さいました。ほんとうに疎開して来たのを喜びました。そうしてこの学校の友達もなにくれとおせわして下され、しあわせものだと思います。そうして先生や区の友達も付近のことをおしえて下さったり、これはどこそこだという事も、すっかりおしえて下さいました。
そうして、大阪から、滋賀へ集団疎開だった友達の事を思うにつけても、ほんとうにうれしくありがたいので、頭がさがりそうです。こちらは道が遠いので、始めはいやであったけれども、そのことで、体もめっきりふとってまいりました。もし今頃、疎開して来たのがつくづくありがたく思っています。
いまもしも大阪でいたならば、鬼畜の爆弾にあたって、お国への御奉公も出来ず死んだかもしれないのに、疎開したのが、もし集団疎開であったら、こんなよいことはないでしょう。高崎のおばさんは、僕たちのために、何のしごとでもやっておいでになります。おばあさんも、僕と弟、そこの家の勝子とをなにくれと注意して下さいます。寒いのに長グツがなかったので、自分のはいているのを僕に貸して下さいましたことを思えば、感謝しないではいられません。学校の友達もよい人がいっぱいいるのでこまった事はありません。
集団疎開だと母との面会日はないのに、近いから、ちょいちょいおいでになります。私くしも、弟も、しっかりべんきょうして、きっときっとおばさんや、先生や、友達の感謝に答えて、きっと、りっぱな国民となるために、この土地で習練をいたします。そうして、この日本をまもるよい日本人になります。終

六女梅組
東京都浅草区（台東区）清島國民學校
寄区

感想
サイパン島玉砕以前は、疎開などゆめにも考えた事がないのに、今日、朝会でこうちょう先生が発表された時の私の心の中には黒い玉でも一時に投下されたように私はごくんと息をのんだ。
楽しく仲良くあそんだお友達とも先生ともわかれ、遠い直江津へ私と弟と、家族の人とはなれて行かなくてはならなくなった時の私の心は、冬、プールの中で泳いだように冷たかった。
いよいよ行く日になった。車内に入った時は「直江津

の人は良い人かしら、もしいじのわるい人がいないかしら」心の中はいよいよ心配になった。でも今かんがえて見ると、おかしいくらいだ。でも来た時は夜空の月を見ると、家でねながら松の木陰に月が光々としていた事が、まわりどうろうのように出て来る。

母の手紙によれば「毎日空襲があっても、小さいあなたがたがいないから十分国土ぼうえいにつくせます」と書いてくださった。その手紙に答えるような生活をしなければならない。それには私と弟とが手をつなぎ勇んで、この苦心な事にうちかたなければならない。それをするには、いつも先生がいわれるように「鉄砲の玉を撃つのではなく、ただ一つ一心こめて学校で勉強することである」と、先生方も父母もそういわれるのだ。

兄弟そろって、これに撃ちかって行こう「吹雪にもあられにも負けず、此の一年を過ごして行きましょう」と、弟とちかった言葉をわすれず必勝の信念で進んで行こう。

六女竹組
大阪市西区　日吉國民學校
新区

感想

汽車が直江津駅に着く。駅のひとがしきりに直江津、直江津と鳴って来る。私は父と一しょにおり、すぐ家へ走った。

さて今日からは二学期が始まる日だ。おばさんにつれられて直江津国民学校へ向かった。学校へついて一時間ほどしてから組及び先生がきめられた。

学問が始まった、だが教室の中へ入ると、もとからの生徒さん達がしきりに私達の方を見るのでとても恥ずかしい。先生は、しんせつに物事を教えて下さる。私はとてもよい先生に受けられた事を心から喜んでいる。

遊ぶ時間などは、まだお友達が出来ないので、一緒に入った人達と遊んだ。だが三日程すると、もう学校の人達と仲よくなった。特に中隊長の宮本さんとは一番仲がよくなった。

掃除の時間は、夏であるのでとても身軽なかっこうで当番が開始された。皆一どきにふき始めた。はく人も一生懸命である。まもなく当番が終わった。

寒い、寒い冬がやって来た。雪が降り出すと私は大きい雨貝に、お父さんの長靴をはいて雪をけって走る。学校も雪で真白だ。でもきれいなので私はめずらしい。まだこれからが多くつもる。今この雪でまければ、この戦争に負けた事になる、私はこれから雪を米英と思って、これから一生懸命にやっていく。終

六女竹組
神奈川県川崎市　旭町國民學校
片原区

感想

私はこちらへ来る前、私は直江津はどんなだろうかと私は思いました。私と弟はみんなより寒いそうだとゆ(い)われました。私は、始めに親からはなれて来るのはやだと思って、私と弟はおやの前でなき出しました。

私は学校へ行く時に、私はげたをはいて行きますが、町の人は、たぶん長ぐつを持っていますが、私がげたをはいて行くと、みんなが私の所を雪をなげるから、私がつめたいじゃないというと、わざとにひっかけます。私

は、はき物がないので学校へ行く時につめたくて、なきそうの顔で学校へ通っております。おばさんが早く先生に長ぐつをもらわなくてはいけませんと、いつも私はしかられております。

私はいつも感じているのは、東京が空襲が来ておるから川崎も空襲が来るのかと思って学校から帰って来ると感じます。

こちらは雪がたくさん降るのでたまげてしまいました。川崎はこちらよりも雪が少ししか降らないので、私は直江津は、雪が屋根まで降るから、今から寒さに負けていればもっと降ったら、おまえなんか、おどろいてしまうかもしれないとゆって、家のもんにも、町のもんにも、ゆはれたので私は、今から寒さに負けていればいけませんから、私はもっとがまんしようと思います。

私は初めにきた時に、みんなからいじめられたり、なかされたりしてばかりいました。私は、もう土地がなれたので、私はこのくらいの雪ならへえきです。

私はこちらへ来たらば、冬になっても、たびだの靴がはけないので、私は足がつめたくてたまりません。集団疎開したひとは、私達よりもどんなにつらいかわかりません。

六女竹組
東京都本所区（墨田区）菊川國民學校
八幡

感想

私は始め東京で集団疎開しましたが途中から新潟へ疎開しました。始めは二年生にいる妹といっしょに来るのでしたが、家のつごうにより私もここへ来たのですが、新潟は雪国だというので、東京では降ったといっても少ししか降りませんから、私も妹も早く行きたいといっていましたが、こちらへ来たらば風で雪が吹ぶき、お天気の日が一日もなくて寒くていやになってしまいました。けれとも一つういいことは、こたつの中にはいれるのでうれしかった。

私がこちらへ来る前に、二、三度空襲が敵機が私達の家の上空をとんいることもありました。その時は、早くこちらへ来たい気がしました。そうしてまだ家の用意が出来ないため、私だけ妹の来ているこの新潟へ来ました。

こちらへ来たのは十一月の十九日、もう山には雪がかかっていた。私はそれから学校に来た。この直江津にも雪が降り始めたので今度は長ぐつで通うのです。けれどもお兄さん達が来て、どうしても長ぐつがなくちゃかよえなくなったので、私のを兄さんにかしてあげて、私は、短いごむぐつでかようことになった。

マントは今私が来ているうちでかしてもらった。長いので少し雪が積もった所へ行くとマントがひきづり、くつがみぢかいので、学校に着くと、もんぺのすそがぬれていてつめたい。家へ帰るとこたつがあるので、すぐぬれたもんぺをかわかされるのでそうでもない。学校に着いたときが一番せつないのです。

きこうが寒いのでお当番がつめたくてせつないのです。

オワリ

六女竹組
東京都杉並区　第八國民學校
諏訪区

感想

汽車に乗って直江津の駅に到着した私は汽車からとびおりた。うれしくてたまらなかったが、家に行くと夏休みだったので私は愛子ちゃんと海へ行った。

その夜、私は母のことを思い出して泣いてしまったが、今ではなれて来ました。

二十一日に学校へ来ました。おぢい様は前の日に学校へ来て受けつけておいてくださったので、来たらすぐに先生が竹組へ行って下さいとおっしゃった。私は明日から、この学校で勉強をするのだとおもうとなんとなくうれしくなった。

今、私はこれから寒くなるが、長ぐつがないのでこまるが、今は物のない時だと思ってがまんしていますが、私は雪が降ったのでいちばんこまります。はなおがきれて、はだしで家にとびこんだこともあった。

学校で勉強した。そのうちに昼になった、弁当をたべた。そして当番を始めるのであった。私は始めに来た時はなにがなんだかわからなかったが今ではなれた。服がきりりとしてとても働きやすい。私はこちらの学校は、きりつか正しいのにおどろいた。オワリ

高等科

高一男竹
大阪市都島区 南都島國民學校
新区
感想

三月三十日、大阪駅を出発して夜こうで一路直江津へむかった。そうして出発をして一、二時間すぎた頃、向こうの子供達は皆んな親切であるか、又悪いかということが僕の頭に渦巻いていた。そうすると間もなく僕はぐっすりと眠ってしまった。そうすると何時間も眠っていたろうか、そして母におこされて見ると、いつか幼年の時に見たようなところだった。僕は母に聞くと、これは郷津だといわれた。僕は直江津はもうすぐかねと開くと、もうこの駅の次だよといわれたので、僕は早く直江津へ行くとよいがなあと思いました。そうして直江津へ着くと、さあこれから改札口をでて家へと急ぎました。

その時に南校の前を通った時に、僕は母にあの学校へいくのかねときくと、ちがうよとおっしゃいました。お前の行くのは春日新田校舎（？）だといいました。

僕はその次の日は、お正月も何もないのだ「僕は、がんばる。戦争が終わるまでかんばる」。



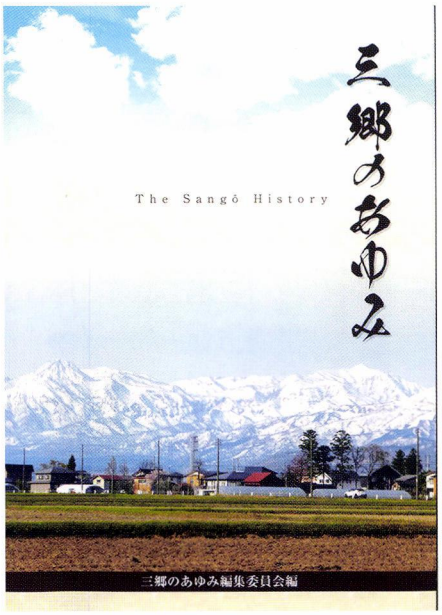
疎開の児童も降り立った直江津駅
（昭和 15 年竣工）

越後国都の視点
―文化財にかかわった半世紀―

小島幸雄

はじめに

私は、本年三月末日で上越市釜蓋遺跡ガイダンス学芸員を辞して、文化財の仕事から退いた。昭和五〇年に富山市教育委員会にお世話になり、五二年には上越市に移って大学時代を含めて半世紀の間、何らかの形で文化財にかかわってきた。令和四年で七〇歳になるのを機にそろそろ一線から身を引こう、と考えていた時、「三郷のあゆみ」編集委員会の保坂裕子さんから「三郷の古代」という題で一文を寄せてほしいと依頼され、自分がかかわった文化財の中でも特に多くの時間を割いた古代遺跡に関することでもあるのでお引き受けしたのだった。



三郷の古代
古代越後国府はどこにあったのか？

依頼があってから、自分がどんな遺跡を調査したのだろうか、上越市に来てからの四五年間でどんなことをしてきたかと思いを巡らせていた。ここにあげたらきりがないが、絞り込んで残ったのは越後国府・越後国分寺の所在、春日山城跡と越後府中、吹上・釜蓋遺跡の弥生集落と大きくは三つの遺跡群だった。と考えてくると、これら三つの遺跡群はこれまで「直江の津」に紹介してきた地域を見る視点と同じであり、同時に今後私が追い求める遺跡群であることが明確になったのだった。

やはり、藤木久志先生が話されたように「越後の国都」を考える視点、古代越後国府が地域学の基層となっていることを痛感した、と同時に本誌が通巻五〇号を迎える機会に、もう一度国府を考えて今後の視座とすべきだと考えた。

「直江の津三二号の対談」

本誌は五年間休刊の時期があったが、休刊直前の三二号でシリーズ「上越後のかたち」の締めくくりとして企画された川村知行氏との対談を行った。その中で最初に話題に上ったのが五智国分寺の謎だった。当時、奈良時代の国分寺は五智ではないとすることに異論をはさむ余地はなくなっていたが、謙信が再興するまでの国分寺、言い換えると古代の国分寺と五智国分寺をつなぐ中間のそれがどこにあったかが課題であった。しかし、ここに大きく立ちはだかっていたのが、万里集九の「海崖(かんがい)に冠(かん)たり」で、いわゆる越後国分寺海没説が支持を得ていたころの話だ。ちなみに、海没説は現在も根強く支持されている。

上越市に採用になって間もなく、五智地区の更正図の集成作業を行ったことがあった。春日山城と越後府中全体を網羅するというもので、膨大な更正図を複写していたとき、大字五智国分の最後の地番の土地がどこかわからないで困り果てていた。ある日、御館跡周辺で空白となっていた四角の部分に同じ形の図が抜けていて、ピッタリとはまったのだった。

御館跡の周辺は五智国分の最も若い番号があるところでびっくりした記憶がある。なぜそんなに驚くかというと、大字五智国分の四角い更正図の番号の前の地番は岩殿山にあったからなのだ。なお、四角い土地に付された番号は、直江津町の飛び地だったものを春日村に移管したときに付された地番だったと記憶している。

さらに五智国分寺の火災後に行った文化財調査から、現在は天台宗寺院であるが中世には真言宗であったこと、堀氏が入った慶長年間に無住となった時期があることも判明したのであった。詳しくは、「新潟県上越市五智国分寺資料調査報告書」（上越市教育委員会）を参照されたい。それに加え岩殿山に金剛界大日如来が安置されていることは一二世紀後半には岩殿山に寺院が存在した可能性を示し、岩殿山の山頂部に五智国分の地名があることは、国分寺の旧寺地である可能性が指摘できるのだ。

相前後して、新潟の金子拓男氏、糸魚川の木島勉氏と岩殿山を歩いた。写真の珠洲焼は一二世紀末から一三世紀ころに



木造大日如来坐像（「上越市の文化財」より）



珠洲焼（上越市教育委員会蔵）
経筒の外容器（高さ約 29㎝）右は蓋

焼かれたもので、経巻を入れた経筒を収めて埋納する外容器である。一緒に採集されたものに蓋もあった。灰色でほぼ完形のものだったので、遠くで気付いたときはバケツが転がっていると思ったが、近づくと珠洲焼であるので驚いた。生活遺跡から出土すると、よほどでないと割れているものだがほぼ完形で、経塚の埋納品である可能性が高い。

一二世紀の大日如来といい珠洲焼の外容器といい、いずれも動産であって移動は考えなければいけないものの、宗教空間を想起するには十分な証となろう。

対談では「外から内を見る」という視点が話題になったが、我々は常に外のものを見て自分の街を見ていくということを考えてきた。

国分と国府

読者は国道八号に「国府」という信号機が設置されているのをご存じであろう。国府の根拠はもちろん地名であるが、これは近代になってからのもので、明治時代に国府村が置かれたことによる。また、昭和四三年に直江津市の町名となって今に至っているから、古代の国府から続く地名ではないということになる。

明治二二年に国府村が成立しているので、それ以前の地名を見てみよう。「新潟県地名大辞典」（角川書店）によると、江戸期には国分寺村があって、五智国分村（国分寺領）、愛宕国分村（愛宕社領）、毘沙門国分村（惣持寺領）、大場村（称念寺領）、居多村（居多神社領）などを総称して国分寺村と称したとなっている。その後明治になって分離独立した村となり明治二二年に成立した国府村の大字となった。前述の更正図を集成したときには、地名の最後に寺の文字はなかった。その国府村も長く続かず、一二年後の明治三四年には春日村の一部となり、地名は大字として継承されていった。

更正図を集成していて気付いたことがある。大字がとても複雑というか細かく割り振られていたようだった。これは、収量の多い水田からランクを付して各寺社に割り振って、寺社ごとの収量（耕作の手間も含め）が均等になるように配慮されていると思われた。

先日、記憶を確認するため更正図を集成したときに複写した図を見せていただいた。四〇年以上前の筆者自筆の文字が確かに書いてあり、取り出した一本目の筒で実証されたことに感激した。図には必ず小字ごとの地名と図面番号が書かれているので私も必ず転記していた。そこには「直江津市大字五智国分字岩戸谷全図二ノ内乙」と私の字があった。なお、筒の写真は私の字ではなかったので、私の退職後に別の職員が書いたのであろう。

このようにみてくると、明治二二年以前には国府という地名はなかったことになる。「新潟県地名大辞典」五四一ページの「こくふ　国府〈上越市〉」の項の冒頭を見ると「明治二二～三四年の中頸城郡の自治体名。「こくぶ」ともいう。（略）」とある。それまで使用していた「〇〇国分村」を統合して「国府村」という自治体名にしたが、前掲書によれば「こ



五智国分寺伽藍
越後国分寺の法灯を継ぐ寺院
本堂が昭和 63 年の火災後復興された

くぶむら」とも呼ぶきわめてあいまいな呼称だったようだ。

明治三五年、吉田東伍の大著「大日本地名辞書」が出版された。その中の中頸城郡の冒頭「(略)妙高山と米山の間の一大沃野を占む、古国府にして、(略)」と記されて古代国府の地とした。続いて「国分寺」の項では「コクブ」とルビをふっている。さらに進み「国府址」は「コフ」とルビがあり、「国分寺の東、直江津市街の南なるべし。庁舎の跡は分明ならずと雖、国分寺、八幡宮、祇園社等の存在に依り、旧址も其間に外ならざるを知る。(略)」とある。ここに越後国府が直江津とされたと考えてよいのだろう。吉田東伍の大著であったがゆえに、その後長く直江津に国府があったとされることになる。五智国分寺の存在も古代において国府と国分寺が一体であったが故に、誰もが疑わなかったのだろう。

「新井市史上巻」八九ページに、「(略)地名については、音への意味のない宛字が多い故、単に地図上に記される活字からの推測は十分にいましめねばならぬところである。(略)」とある。私は卒論の時に読んだ市史の加藤晋平氏の文章をいつも肝に銘じ現地に出かけ現物をみるように心がけている。





上 鴻臚館跡　下 福岡城跡

史跡の下にもう一つの史跡がある。福岡城の天守台は礎石がよく残っていたのと、安土城と同じで石垣が礎石より高く積まれていた。

鴻臚館にて

先日、昭和四六年に同じ寮に入った学生で所在のわかる七人が鹿児島に集まることになり、鹿児島在住の一人を除く六人が博多に集結した。翌日鹿児島へ移動する途中で熊本に寄る三人と離れ、博多に残った三人で福岡城跡を訪ね、もちろん鴻臚館(こうろかん)の展示館も見学した。

鴻臚館は「国史大辞典」に「古代において主として外国使臣の接待機関として設けられ(以下略)」とある。全国に三か所あったらしいが今回訪ねたのはそのうち筑紫の博多津に設けられていたものだ。そこには多くの出土品が展示されていた。中でも目を引いたのは、展示館にある発掘調査された当時のままの露出展示の遺構だった。特に目を引いたのが瓦だ。越後でも瓦は出土しないことはないが、その数は極めて少なく、古代の瓦が出土するとそれだけで気持ちが高ぶったものだった。瓦の出土は堂塔の存在を知る手掛かりとなるもので、奈良時代の瓦が出土すれば国分寺の存在を予想することができるのだ。

今池遺跡の発掘調査を指導された坂井秀弥氏は著書「古代地域社会の考古学」の中で、北陸道の佐渡を除く各国の国分寺で瓦の出土が少ないことを指摘され、その理由を雪に求め



五智国分寺三重塔

られている。雪の水分と気温の低下で瓦が破損してしまうこと、降り積もった雪が落下するときに瓦も引きずって落下させることを指摘された。

私は、瓦の落下を実体験として認識してきた。五智国分寺だ。文化財の担当をしていた私は、毎年春になると国分寺の三重塔の瓦が落下していることを確認しに行った。最も破損するのは初層、そして方角は西面であった。北面がそれに次ぎ、東面と南面はぐっと損壊の比率が下がるのだった。損壊の部分は軒先が大半を占め、軒瓦以外の破損はそれに比べ破損率はずっと低かった。このことは西面と北面に多くの雪が積もり、自重で落下して下層を傷つけることになることが分かった。三重塔は安政三年（一八五六）に着工されたことが記録に残り、江戸後期には普及していた釉薬を塗った瓦を葺いているので雪に耐えるようにはなっているが、三層の建物であって最上層から落ちた雪は下層になるほど軒の長さが長くなる初層の軒瓦を直撃して破損させるのだ。

坂井氏は古代国分寺が基壇のようなものが残ることと瓦が多量に出土するため遺跡の認識が容易で、地名からも国分寺と確定することが容易としている。東日本では越前と越後が未確定以外、東海道・東山道の諸国はすべて確定している。

坂井氏が、基壇が残っていて判断しやすいとしたり、瓦が多量に出土することを挙げたりされていることに相反するように、越後は多雪地帯であり瓦葺きが不向きであったと推定されることと、水田の造成によって基壇が削平されて現状で目視できないことが確認をむつかしくしており、きわめて条件が悪いのだ。昭和五〇年代半ばまで高田平野には遺跡がなかったことがそれを如実に物語っている。土地が高い部分は削り、削った土は低い土地に埋め込んで平坦にする、これを繰り返して水田が造成された結果が、今我々が目にする高田平野の美田なのだ。

鴻臚館も平安時代後期にはその機能を失い歴史の表舞台から姿を消したようであり一七世紀に黒田氏によって福岡城が築かれて以後はその存在すら忘れられていたようだ。鴻臚館跡が福岡城跡にあったとしたのは中山平次郎という九州大学の教授で、のちに平和台球場の改築に伴う発掘調査でそれが実証されて現在は公園となっている。

施設（建物）は、造営された時の機能が失われると取り壊されたり放置されることによって荒廃する。国営事業で作られた国分寺も荒廃し、後世の稲作経営の障害として基壇も削平された。越後国分寺の最有力候補地は市内三郷地区の本長者原地内だが、そこには基壇のような高まりは現存しない。大きな石があったらしいがそれも失われてしまった。大正から昭和にかけて三冊の「三郷村史」が刊行されている。最も古い村史では村内西松野木に古代の条里制の跡があるとされたが、昭和三六年に刊行された最後の村史では条里制らしいとしながら一三〇〇年前の北辺の地に「条里」があったかどうかという疑問を呈している。大きく後退してしまったのだった。

国府はなかなか確定がむつかしいが国分寺は基壇や瓦で確認が容易である。そのことが越後国府・国分寺を考える壁になってしまった感は否めない。

国府サミットの開催

今年は上越市で「こしのくに国府サミット」のフォーラムが予定されている。平成二五年に越前国府の所在地とされる福井県越前市から始まり加賀国府推定地の石川県小松市、能登国府の七尾市、越中国府の高岡市とつないできたが、越後国府の年になって新型コロナウイルスの影響で二年続けて延期になっていたが、今年はどうにか開催できそうだと聞いている。

サミットは古代北陸道に属した国の国府所在地の長が集まって古代遺跡などの文化財を生かしたまちづくりについて意見を交わす場として始まったもので、現在北陸道七国の内若狭国を除く越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の六国が

参加している。この中で国府が明らかになった国を挙げようとしても推定地はあるものの国庁が見つかっている国はない。しかし、国分寺はというと確実な国は能登と佐渡で、ほぼ確定に近いのは越中といわれている。これに若狭国を入れると七国中四国が確定もしくはほぼ確定の段階にきている。加賀国は平安時代になって建国されているので、奈良時代の中頃に詔が発せられた国分寺が建てられたかは疑問が残っている。

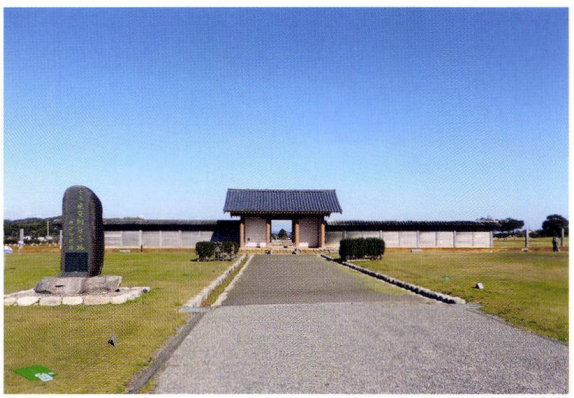
さて、北陸道で国府が確定している国が少ないのに対し国分寺が確定している国が多いのは、坂井氏の意見を引用したように多雪地帯の自然条件が影響しているのであろう。雪と稲作という越後の代名詞ともいえる自然と産業は、古代の景観復元にまで影響を及ぼすほどだったのだ。越後に限って言えば、明治三五年に刊行された「大日本地名辞書」において国分寺が（居多浜の南にして…）とあり、（この寺は天平の御願にして…）と書かれていれば、ほかの地に越後国分寺の伽藍を想定することなどできなかったであろう。ましてや近世の新田開発は河川改修と用水の開削、そして高地と低地の平準化を推し進めたことは明白で、もし近世まで古代の伽藍の基壇が残っていたとしても、農地の拡大の前には大した障害にはならなかったと推測される。大正一五年に刊行された「三郷村史」には塔の心礎と考えられる三メートル近い大きな石が存在していたことが記されていて、大正六年に一〇分の一の模型を作ったとあるが今はそれすら失われたということだ。村史の著者も「此考古の大記念品を滅失せられたるを遺憾に堪えず」と無念の胸中を吐露している。もし、この大きな石が本長者原に存在していたら、国分寺ではないかと考えるであろうし、越後古代史の謎はもう少し前に解決の糸口が見えていたかもしれないのだ。文化財はないものねだりができない、したがって今できる方法は考古学や地質学の手段を駆使して検証することだと思う。

今年のフォーラムでは、古代史の小林昌二氏、考古学の坂井秀弥氏（前出）をお迎えして開催されるようだ。多くの皆さんに古代越後の景観に思いをはせていただけたらと思う。

ところで、三郷地区に国分寺があったとすれば近くに国府を求めたくなる。その可能性を秘めている遺跡が、昭和五五



国府サミット（富山県高岡市勝興寺にて）





上　能登国分寺の復元された中門
下　復元された塔の基壇、中央の一際目立つ大きな石は塔の心礎

年から五七年まで四年間発掘調査が行われた今池遺跡と子安遺跡・下新町遺跡だ。掘立柱建物跡で構成される三遺跡は上越地方で初めて発掘されたもので、その時の感動は今でも忘れることはない。

昭和四七年に千葉県市川市国府台（こうのだい）で発掘した遺跡は竪穴住居だらけのものだった。そして、国府台の遺跡は下総国の国府に関連した遺跡だと聞いていたので、越後では掘立柱だった時になぜだと考えたほどだった。国府台の遺跡は子安遺跡などと同じ平安時代だったのに竪穴住居跡だったからだ。出土する遺物は見たこともない緑釉陶器の唾壺があったりしてなんだかわからず、とても新鮮な発掘だった。この発掘に参加した経験が、昭和五三年に調査した上越教育大学用地の山畑遺跡に大いに役立った。

まとめ　―越後国分寺の法灯―

結局のところ、このまちを考える素材は国府があったまち「国都」、越後国府に尽きるのだ。国府があったからこそ府中になり、府中であることが春日山城を生み、春日山城から福島城となり、さらに高田城へと発展していったのだ。

国府という地名は新しいものであると思われるが、五智に国分寺があったからこそ「国分村」から「国府」という地名が生まれ、この地が古代越後国府であるという地域の歴史が生まれてきた。ということは、古代の越後国分寺の法灯は紆余曲折を経て現在の国分寺に継承されていることになる。私はことあるごとに「上杉謙信の国分寺再興は、国主待遇を得た謙信の地位のアピールだ。奈良時代に勅願で国司が行った国家事業に自身を置き換えてそれを示したかったのだろう」と言ってきた。

ないものねだりのできないのが歴史だとしたら、現存する五智国分寺から再度地域を見直し、古代越後国分寺ではないかとされる本長者原廃寺にさかのぼるプロセスを追及する必要を痛感している。これまでも忘れたことのない古代越後国分寺・国府を求めてまたスタート地点に立とうと考えている。

（元上越市学芸員）



今池遺跡
発掘調査時の空中写真。白い点が掘立柱建物の跡。（「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書１」より）





山畑遺跡
今池遺跡の時代より100年ほど古い時代の遺跡、未だ竪穴住居だったものが掘立柱建物の年に変わった。（「上越市史　通史編１」より）



歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

藍商人がつなぐ 住吉神社と 泉蔵院





直江津の関川に架かる荒川橋に近い住吉神社の境内に、一対の石燈篭がある。竿の部分に、

安政二年乙卯夏六
阿波国名東郡中村
〈六手塚六三郎
江之島屋利助

と彫られていて、安政二年（一八五五）阿波国（徳島県）の人が奉納したものであることがわかる。江之島屋利助とは〈六の屋号であり、江戸京橋にも店を構えている藍商人である。

なぜ阿波徳島の人が石灯籠を奉納したのだろうか。中村辛一先生（新潟大学教授・一九一一～二〇〇〇）が「郷土史」（昭和三九年・直江津市史蹟保存会刊）に寄稿した「住吉神社の石燈篭」を見ながら話を進めよう。

住吉神社とは、神功皇后の新羅出兵（古事記・日本書紀）で住吉の三神が軍功を立て、凱旋後に皇后が祀ったのが摂津一の宮・住吉大社である。以来、国家鎮護、航海守護として崇敬を集めることになり、なかでも海上安全の守護神として、海運業や漁業者の間で特別厚く信仰された。

湊まちである直江津今町に住吉神が祀られて当然ともいえるが、いつ勧請されたかはっきりしていない。もともとは八坂神社境内の神明社の隣りに祀られていたようだが、直江津の廻船問屋や諸国の海運業者、商人が住吉神を海上守護神の神社として、独立した境内地と社殿を建立したいと望むようになるのも不思議ではないだろう。

天明年中、荒川（関川）の岸に土地ができたので、同七年（一七八七）、高田藩へ川岸の一部を社地として下付を願いでて許可され、東西三〇間（約五四・六m）、南北五〇間（約九一m）を社地として社殿を建立し、八年に遷宮している。「明治十六年神社明細帳」（上越市史・別編3・寺社資料一）に「当地有志者藍屋商人等と協力して建立す」とある。現在の社殿は数度の焼失を経て明治一二年再建（その時、境内地を一部売却）。

その後、昭和一二年に創建一五〇年記念として、社殿





の増築や玉垣を改修し、その記念碑の冒頭には「直江津港守護四社之一也」と書かれている。直江津港守護四社とはどのようなものか、当然、残りの三社も残念ながら不明である。

碑に刻まれた寄付者名を見ると、直江津の有力者や海運にかかわる会社のほとんどが名を連ねていて、そのなかに山口・横浜・東京・新潟の個人名が刻されているのは、どのようなかかわりを持つ人たちなのだろうか。

さて、当初の社殿の造営に当たって、灯篭を寄進した江之島屋始め阿波の藍商人が多額の寄進をしているが、先の中村先生は、単に神護に頼ろうとするだけではなく、「神信心を通じ、その人たちとの間に、いわば信仰共同体とでもいうべきものを作って、その親近性を利用し、取引を円滑ならしめようとした商業的理由もあった」と述べている。

境内右手の手水舎の手水石には、

寛政三年六月（一七九一）

大阪
阿波　藍染屋中

と刻まれた手水石もある。

中村先生は、八坂神社に合祀されていた時代から藍商人の崇敬が厚く、奉納した酒徳利（徳利は失われた）の箱が残されていると書いている。

箱書きに、

奉献住吉宮
御神酒徳利壱対
大坂
阿波屋喜兵衛

宝暦十四甲申六月廿一日（一七六四）

とある。阿波屋喜兵衛は大阪に問屋を持つ藍商人で、旧栃尾市の秋葉神社に藍商人が寄進した灯篭にもその名がみえるという。

阿波徳島が藍の特産地になったのは、天保一三年（一五八五）、蜂須賀家が入封してからのことであるという。吉野川下流域は氾濫が頻発し稲作に適さなかったが、藍が栽培されていて、それに着目した蜂須賀氏が旧領の播州から生育方法を伝えて、量産を奨励したからであると言われている。

その後、文化年間になると阿波藍が大阪の市場を独占するようになって行くが、その移出に関しては株仲間が独占的に扱うようになった。これは後発の藍商人の参入阻止と、他国との競争力の強化に加え、徳島藩の重要な藩政の財源になっていたためで、そのような両者の思惑が株仲間を組織させたと言われている。

藍商人は全国に「売り場株仲間」を構成して、次第に独占的に藍を販売するようになっていくが、直江津の住吉神社に燈篭を奉納した手塚六三郎は、「越佐売」という株仲間の一人である。

直江津今町を訪れた藍商人の財力を語るものとして、安政三年（一八五六）年生まれの伊藤サツが、昭和六年に刊行された、直江津農商学校「交友会報」の座談会で、「藍玉の衆が来た時分には実に賑やかであった。遊郭は

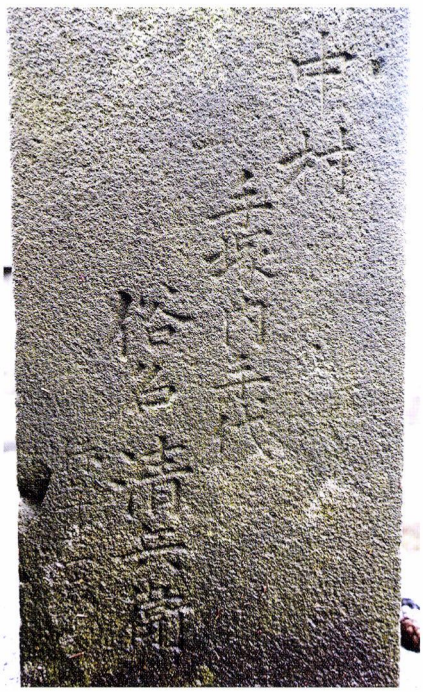
一軒残らず提灯を点けて、総揚げとヤラシャレを踊ったものだ」と、語っている（サツ当時七五）。

直江津今町を訪れた藍商人にかかわるものとして泉蔵院の墓地に大変興味深い墓碑がある。

觀阿清果信士
阿州中村
手塚内手代
俗名清兵衛
行年□□一歳
天保九戊戌（つちのえいぬ）年（一八三九）
十月十二日卒

と刻まれていて、泉蔵院の檀家で手塚屋という商家の手代だろうくらいに思っていたのだが、じつは、住吉神社に灯篭を寄進した手塚屋の手代で、今町で藍の商談中、もしくは手塚屋今町店の人で、病を得て死去し葬られたのではないかと推理してみた。手塚屋六三郎が燈篭を寄進する一六年前のことである。





もう一基、清兵衛の墓の並びに、

觀心暁道居士
阿波国宮嶋浦
俗名　和久屋喜兵衛
寛政九丁巳（ひのとみ）年七月四日□（一七九七）と刻まれた墓石も見つかった。

和久屋のある宮島浦は、現在の徳島市川内町（阿波十郎兵衛のモデルになった坂東十郎兵衛屋敷がある）で、吉野川流域の藍の栽培に適した地であり、久和屋喜兵衛も何らかの形で藍にかかわった人物と考えられる。

住吉神社の奉納燈篭、泉蔵院の二基の藍商人の墓、遊郭の賑わいの思い出を見れば、直江津今町が藍の流通拠点としての重要な位置を占めていたと考えてもよいのではないだろうか。

二人はなぜ泉蔵院の墓地に葬られたのだろうか。



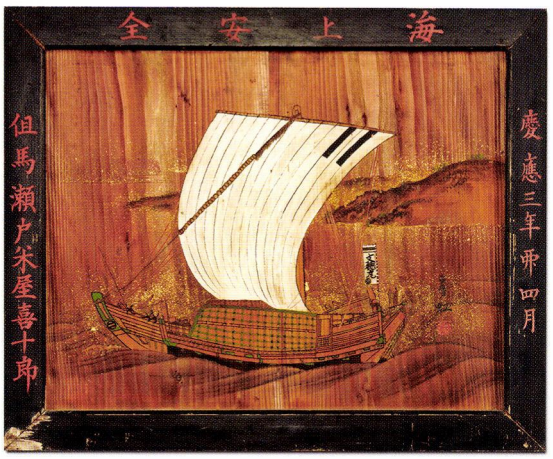
泉蔵院には、但馬瀬戸（兵庫県豊岡市）の米屋喜十郎や西頸城鬼舞村の五左衛門が奉納した船絵馬、直江津の廻船問屋が奉納した花台、そして境内には笏谷石の地蔵などが奉納されている。また御館の乱で焼失後、堂宇の再興がならなかったが、正保二年（一六四五）の春（松平光長の時代）、新潟の播磨屋三十郎の船で、直江津の美濃屋善兵衛あてに材木が届き、問いただしたところ、二人の旅の僧が泉蔵院再建の用材にせよと値を置いて去ったというのだ。以来、本尊を別名「木流し地蔵」と言われるようになったと泉蔵院の縁起にある。

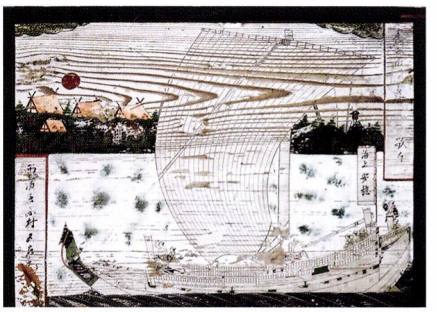
このように泉蔵院は、海運にかかわる物や伝承が残されていて、本尊の延命地蔵への強い海上安全や船玉信仰があったものと思われる。

海運にかかわる物として、最近、泉蔵院の境内に瀟洒な小庭園が造られ、そこに「片田八右衛門」と掘られた灯籠が一基おかれた。この灯籠は直江津今町の新町通りに店を構える有力な廻船問屋で廻船持ちの片田八右衛門が奉納したものである。廻船を意識したものかどうか、船石も配されている。

大正一〇年の泉蔵寺の本堂改修・仁王門建立記念えはがきを見ると、本堂前と仁王門前に同系の灯籠が一対ずつ置かれている。灯籠は何らかの事情で撤去・保管を余儀なくされ、一基だけだが再び日の目を見ることになったものと推測できる。

（北越出版・佐藤）











発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

テレビニュースで、ロシア軍に攻撃され、地下壕に逃げたウクライナの子供たちの映像を見て、涙が出そうになってしまった。

七七年前の日本でも、同じようなことが起こった。今はみんな忘れて、まるで違う世界の出来事みたいに思っている。『疎開児童感想文』を読み、厳しい状況の中でも直向（ひたむ）きに元気な子供たちの姿が目に浮かぶ。この状況は二度と繰り返してはならないはずなのに。

（事務局）

目次

特集　直江津國民學校　疎開児童感想文　4

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ ⑦
越後国都の視点
―文化財にかかわった半世紀―
元上越市学芸員　小島幸雄　20

歴史は「今日」への手紙
藍商人がつなぐ住吉神社と泉蔵院　27

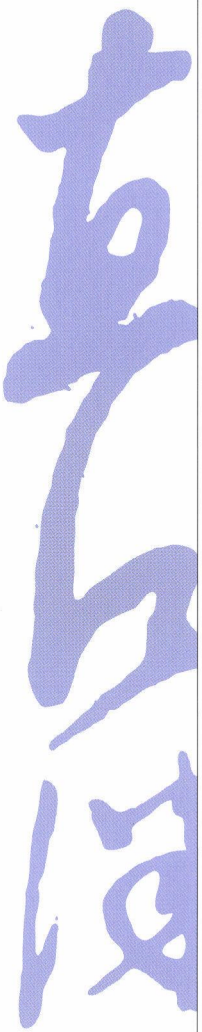
巻頭エッセイ・私の直江津
直江津の海とサメに想いを馳せて　井部真理　2

「直江の津」
第一九巻二号　通巻五〇号
発行日／令和四年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2022・2号

直江の津

発行／令和四年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



須布価格／五五〇円（税込）